

「協力と工夫で、研究も子育ても」



インタビュー④

計測標準研究部門
ナノ材料計測科ナノ構造化材料評価研究室
(つくばセンター)

研究室長 **伊藤 賢志** (左)

主任研究員 **高塚 登志子** (右)

出産・育児を支える協力体制

伊藤：私たちの研究室は、ナノレベルのものづくりに必要な“ものさし”に相当する「標準物質」を開発しています。部材製造現場の装置校正や測定結果の精度管理に役立てられているこの標準物質の開発では、品質システムの構築と手順マニュアルの作成が重要な

要素になります。

高塚：例えば「ハフニウム定量用酸化ハフニウム薄膜」の場合、このマニュアルのために約6年の開発期間で蓄積された標準物質生産に関わるエッセンスが詰めこまれています。私は2013年の夏から第二子の産休に入ったのですが、その際に必要な業務として、この膨大な量の書類の引き継ぎ作業がありました。

伊藤：このとき室長として心がけたのは、高塚さんが担当していた仕事をグループ全体で連携してカバーできるように、スタッフ同士で話し合う機会をもつようにしたことでしょうか。

高塚：産休に関してはこれまでも数多く前例があったので、取りにくいという印象はありませんでした。引き継ぎなどにご協力いただきながら、余裕をもって休みを取ることができたのは、ありがたかったですね。

仕事と子育てのベストバランスを

伊藤：高塚さんはこの秋に産後の育休から復帰したわけですが、分担すべき業務を想定し、実際にこなせるかどうかをあらかじめ相談しながら進めるようにしました。個人的な感想ですが、

上手に時間を使って仕事をさばいてくれていると感じています。

高塚：ありがとうございます。復帰してからまだ間もないこともあり、仕事と2人の子育てをどう両立していくか、バランスの取り方を試行錯誤しているところですよ。

伊藤：産総研は研究職の勤務形態として裁量労働制も導入していますから、時間の使い方はある程度、個人に委ねられています。その点、産休や育休を取る人にとっても、業務を引き継ぐ側にとっても、フレキシブルに対応できる環境だといえるかもしれません。

高塚：それはあると思います。私としては、復帰前から時間の余裕がある時にグループのメールをチェックして、研究室の状況を把握するように努めていました。二人目の子どもということもあって、不安はあまりなかったのですが、都合があって地域の保育所に子どもを預けられない場合でも、つくばセンター内の「一時預り保育所プチチェリー」で面倒を見てもらえるのは、本当に助かっています。

伊藤：これからも仕事と育児を上手に両立しながら、引き続き研究に力を注いでもらえればと思います。

写真：薄膜材料のナノ構造解析に用いられる「薄膜評価用X線散乱測定装置」の前で